

## 日中書道交流史概観 (草稿)

ただ今御紹介をいただきました東京都日中友好協会参与・書道部会副部会長の井垣清明です。標題の「日中書道交流史」について2つの面から考えてみたいと思います。第一は、人の交流・物の交流です。第二は、漢字と仮名についてです。

### (甲) 人の交流・物の交流

日本と中国は、一衣帯水の隣国です。今は、海を隔てておりますが、大昔・氷河時代には日本列島は大陸と陸続きで、中国にも日本にもマンモスが生息していました。表意文字の漢字は、中国で発明されました。最も古い書体として、甲骨文字といわれるものが、三千年以上前に使われていました。その漢字が日本に伝えられてから今日までを考えますと、日本は輸入・模倣・追随を主としてきました。仮名については(乙)で述べます。要するに、中国が先生で日本は生徒であったと言えます。

#### (1) 漢字・書籍の輸入

漢字は、古くは貨幣や銅鏡・刀剣の銘として日本へもたらされました。

㊤貨幣：弥生式土器と共に出土した貨泉（王莽錢）は、主に西日本の30数か所の遺跡から計70余枚を数えます。この王莽錢より古い半兩錢や五銖錢も出土しています。

秦・始皇帝の秦半兩（BC221年）や漢半兩（BC175年）のほか、漢の五銖錢などの貨幣がそれです。

これらを真似て、日本で最初に作られた貨幣は、ずっと後の「和同開珎」（708年）です。

㊦鏡：文字のある（年号銘記）渡来鏡には安満宮（あまみや）山古墳出土方格規矩四神鏡（235年）など10面程（→いずれも3世紀）があります。

㊧金印：後漢の光武帝は『漢委奴國王』銘の金印を下賜しました（AD57年）。また魏の明帝は、卑弥呼に金印を下賜しました（239年）。

㊨刀剣：東大寺山（やま）古墳出土太刀銘（AD184～189年）は、中国からの伝来です。また石上（いそのかみ）神宮七支刀銘（AD369?年）は朝鮮と関係が深いとされます。そして、日本産の江田船山古墳出土太刀銘（AD438?年）では、人名を一字一音で表記しています。これは、日本語を漢字で表記した初期の例です。同様の例に稲荷山古墳出土鉄剣銘（AD471年）があります。

㊩文献の渡来：朝鮮から王仁（わに）が『論語』十巻と『千字文』一卷を将来しました（285年）。しかし、日本人が漢字を使って日本語を表記するのは、前項㊨にみる如く、これより200年ほど後のことです。

#### (2) 人の交流・物の交流

伝説によれば、秦の始皇帝の命を受けて、不老長寿の薬を求めて徐福が山東省から船出し、行方不明になったとされます。そして日本の和歌山県新宮市には「徐福の墓」があり、さらに日本各地に「徐福来訪の地」が伝えられています。徐福が実際に日本各地を訪れたかは不明ですが、医薬品や陶磁器を含め物品を日本へもたらした中国人が多数いたことは、想像に難くありません。中国のことを英語で CHINA と言いますが小文字で china という陶磁器です。japan は、漆器です。

#### ㉑ 隋・唐を模倣

奈良時代から平安初期にかけては、日本人は、隋唐の文化を模倣・追随しました。長安の街並みにならった平城京・平安京は、その典型です。法隆寺（607年建立）、薬師寺（680年建立）をはじめ東大寺（752年大仏開眼供養）など仏教遺蹟にも隋唐の文化を見て取れます。

#### ㉒ 入唐して学んだ人々

717年に遣唐使として阿倍仲麻呂（701～770年）、吉備真備（きびのまきび 695～775年）、玄昉（？～746年）らが入唐しました。この時、共に渡ったとみられる井真成（？～734年）は、中国でも有名です。さらに唐へ渡った人には最澄（767～822年）、空海（774～835年）や橘逸勢（？～842年）などの留学生（るがくしょう）がいます。みな能書家です。

#### ㉓ 写経の盛行

仏教の伝来（538あるいは552年？）以来、日本でも写経が盛んに行われました。入唐僧が経典を将来し（660年頃の道昭、718年の道慈、735年の玄昉）、そして754年の鑑真和上の来日などにより絶えることなく続けられ、仏教の流布と共に、書写技術が向上しました。また、仏教の伝来と共に中国医学（鍼灸や本草学）も日本にもたらされ、日本人の健康に役立ったのです。唐招提寺を建てた鑑真和上は、仏典の他に医薬品を、そして王羲之の筆蹟など美術品をも持ち来たりしました。庶民に人気のある空海の「弘法灸」は、その一例です。

#### ㉔ 正倉院に中国製の墨

正倉院の御物の中には、朝鮮からの「新羅（しらぎ）墨」や中国からの唐の「開元四年丙辰」（716年）の款記がある墨など複数挺が現存します。

旧来、日本産の墨を「和墨」といい、中国産を「唐墨（とうぼく）」と呼んでいます。唐の墨は稀有で明の墨もあまり現存しません。しかし、明（みん）墨や清（しん）墨をも「唐墨」と呼ぶこともあります。日本の年輩の書家には「明墨信仰」、古墨崇拜があります。

### （乙）仮名の発明

A 漢字は「本当の字」であり、「真名（まんな）」と呼び、これに対して仮名は、便宜的な仮の字と考えられます。しかし、漢字しか知らなかった日本人は、日本語を文字で表記するために工夫に工夫を重ねました。

B 一字一音表記

漢字は、「形（字形）・音（発音）・義（意味）」の三位一体です。これを意味を無視して音を仮りて（仮借）、一字一音で日本語を表記し始めました。5世紀の刀剣銘にその先例がありますが、8世紀の『古事記（712年）』、『日本書紀』（720年）、『万葉集』（759年）になると「万葉仮名」として定着しました。特に『万葉集』では、王羲之を「手師（字の上手な人）」とし、羲之（王羲之の仮借）・大王・手師などを「てし」と読む歌が合計29首あります。これは、奈良・平安時代の王羲之尊崇の表れです。

#### C 仮名の発明に2方向

##### (1) 漢字の一部位を取り出す「片仮名」

10世紀末の『宇津保物語』に「片仮名」の呼称があり、「片」には「不完全・未整備」の意味があります。例：「伊」→「イ」

##### (2) 草書化・簡略化による「平仮名」

平仮名の「平」には、「平易な」という意味があり、初期作品としては、「讃岐国司解有年（ありとし）申文」（867年）が代表的です。さらに、『古今和歌集』（905年）には「仮名序」と「真名序」があります。また『和漢朗詠集』（11世紀初め）には漢詩（行書）と和歌（平仮名）があり、非常に流行しました。例：「以」→「い」

#### D 仮名書きの名手

仮名で書かれた作品には、筆者が無いものがほとんどで、伝某某とされてきました。中国伝来の書風を「唐様（からよう）」といい、仮名書きにみる日本的な書風を「和様（わよう）」といいます。「和様」の創始者は小野道風（みちかぜ 894～960年）とされ、藤原佐理（すけまさ 944～998年）、藤原行成（ゆきなり 972～1027年）と共に「三跡」と称されます。仮名の伝説的名人として、紀貫之（？～946年）が有名です。

#### (丙) 戦後（1945年以後）の日中書道交流

(1) 日本は敗戦後、連合国の占領下にありました。日本占領連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー（1880～1964年）は、書道を「日本軍国主義の温床」と白眼視しました。その結果、1951年のサンフランシスコ講和条約（いわゆる片面講和）までの6年間に、奈良県の墨造りの店は三分の一に減少したとまで言われました。

以後、日中両国間には国交がなく、1972年9月ようやく国交が正常化されました。

この間、中国から最初の正式な代表団の来日は、1954年の李徳全女史（1896～1972年）を団長とする中国紅十字会代表団でした。翌1955年第1回原水爆禁止世界大会に、中国代表団メンバーとして仏教界の趙樸初（1907～2000年）氏が初来日しました。趙氏は以後17回来日しました。1980年には中国仏教会会長・中日友好協会副会長として寺院・大学など24単位以上を訪問し、画仙紙・色紙などに揮毫した作品を残しました。（2009『黄金の絆』発刊）

日本からの書道代表団は、1958年の豊道春海（1878～1970年）団長以下、一行14名が最初でした。以後、民間の書道団体がいくつか訪中しました。

(2) 1972年9月29日、日中共同声明

日中共同声明により国交が正常化されました。周恩来首相・田中角栄首相の調印です。これにより、日中両国間の人事往来も飛躍的に活撥になりました。

中国人の来日も多くなり、中国書画の展覧会もよく催され、文化交流が盛況を呈するようになりました。

(丁) 北京－東京友好書道交流

2017年7月6日、東京・青山で北京市書道文化交流団（胡濱団長以下4名）と東京都日中友好協会との「日中書家交流鑑賞会」が開催されました。会場には、北京市側35点、日本側21点、合計54点の作品が展示され、壮観でした。

その2年後、2019年11月15日、今度は北京書法学院で「北京－東京 民間友好交流書法展」が開催されました。日本側出品53点。林□（山+由）先生講演。

今回、新型コロナウイルス感染の世界大流行（パンデミック）により、人事往来が制限される中、オンラインによる友好交流が実現し、喜ばしい限りです。

関係者の御尽力に感謝申し上げ、今後の発展を期待しましょう。

日中両国人民 世世代代友好下去！

日中両国書法家的友誼 万古長青！

2021年11月25日

東京都日中友好協会参与 井垣清明

（筆記：齋藤 成）